

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成28年4月22日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 アジア・アフリカ地域研究研究科 グローバル地域研究専攻

職 名・学 年 博士課程5年

氏 名 長岡 慶

助成の種類	平成25年度 ・ 在外長期研究助成			
研究課題名	東ヒマラヤにおけるチベット医学の実践と社会変動—北東インド、モンパ社会の集合的記憶に注目して—			
受入機関	ジャワハルラール・ネール大学社会政策研究所			
渡航期間	平成 26年 1月 30日 ~	平成 26年 12月 20日		
	平成 27年 3月 1日 ~	平成 27年 4月 8日		
	平成 27年 7月 11日 ~	平成 27年 12月 12日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )			
会計報告	交付を受けた助成金額	2,000,000 円		
	使用した助成金額	2,000,000 円		
	返納すべき助成金額	0 円		
	助成金の使途内訳	費 目	金 額 (円)	
		航空賃(日本—インド往復)	540,000	
		インド国内移動費(航空運賃)	160,000	
		インド国内移動費(電車・バス賃)	100,000	
宿泊費及び日当	1,200,000			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)			

## 「成果の概要／長岡 慶」

本研究の目的は、開発の進展にともない変容する現代ヒマラヤ社会において、伝統医療はどのように病いに対処し当該社会にどのように位置づけられているのかということについて明らかにすることである。とくに本研究では、近年展開する仏教復興運動の動きに注目し、社会変動の様相を明らかにするとともに、ヒマラヤ社会の歴史や文化をめぐる記憶が現地の人々によって創られていく過程で病いはいかに語られ伝統医療に関連する実践が新たな社会的意味をもつのかということについて研究をおこなった。インドでの在来研究のうち、前半は、受け入れ機関であるジャワハルラー・ネルー大学にてマダブ・ゴーフ・インドゥ准教授から現地調査に関する指導を受け、調査地の人々と円滑にコミュニケーションをはかることができるようにヒンディー語およびチベット語の語学学習をおこなった。さらに、北インドのダラムサラやバラナシ、ダージリンにあるチベット医学組織を訪問し、ヒマラヤ地域の伝統医療の一つとされるチベット医学の保護と発展のために実施されている取り組みや、診療状況、製薬工程について調査を実施した。後半は、インド北東部山岳地域タワン県および西カメン県（アルナーチャル・プラデーシュ州）の村に滞在し、当該地域で暮らすモンパとよばれる人々の社会における（1）チベット医学および村人の用いる民間療法の治療実践（2）病いに関する個別の語りと村の病いをめぐる伝承（3）仏教復興運動の経緯と現状の3点についてフィールドワークを実施した。

まず（1）に関して、チベット医学の診療所を訪問し伝統医の調査協力を得て、伝統医による患者の診察と治療の様子を継続的に観察し、両者のやりとりをビデオや写真で記録した。診療のなかでもとくに重要とされる伝統医が患者に対して最初に必ず行う脈診について、実際に手の脈をおさえながら伝統医からいかに身体の不調部分とその原因について読み取るのかをきいた。また、モンパ社会で幼少期の子どもたちによくみられるといわれる「肝臓（チンバ）が落ちる」病いに関して、その治療をおこなう村の女性民間治療者の家に本人と家族の了承を得て長期滞在し、民間治療者の日常生活やライフヒストリー、村人たちとの関係や治療実践を習得した経緯、病いの治療方法について詳細な調査をし、滞在中に訪れた患者の症状や実際の治療実践を記録・観察して患者に病状について聴き取りをおこなった。そのほか、村に住むさまざまな病いや身体の不調に対して治療をおこなう民間治療者や薬草を用いて薬をつくる民間の薬師にもできる限り多く会い、治療方法や製薬方法、効能についてインタビューを実施した。その結果、モンパ社会における多元的な医療状況とそれぞれの治療者の相違と差異について具体的に明らかにすることができた。次に（2）に関しては、複数の村に短期間滞在して村人から病いの経験について聴き取り調査をしたほか、村の村長の協力を得て村の古い伝承を調査し伝承と関連のある場所を実際に訪問して、そこでどのような儀礼や文化実践がおこなわれている（いた）のかを調査した。病いに関する語りの傾向として、村の人々は自身や知人が経験した病いに対して、病院やチベット医学の専門治療者が語る病因論とは異なった理解をしていることが多く、なかでも土地の神々や霊魂、餓鬼の介在、あるいは他者からもたらされる毒や穢れの介在により

病いが生じたという説明がよくきかれた。人々は、日常生活をおくるうえで、これらの介在する作用体に常に配慮しており、作用体と人々の関係を儀礼によって調整する僧や在家修行者、密教行者は、伝統医療者とともに病いに対処する者として、村の共同体において重要な位置づけにあるといえる。村の伝承においても、同様に神や靈魂、餓鬼、毒や穢れといった作用体に関する話が頻繁に登場し、モンパの歴史や文化を表象する土地の記憶として共有され、伝承と関連する場所やそこでおこなわれる儀礼は実際に人々の身体の不調を癒す効果があると信じられている。とくに、モンパ社会に根強くみられる竜神（ルー）信仰において、池や湖、森の石や木には豊穰や家の繁栄をもたらす竜神が棲むとされており、人々はそうした場所を大切にしてきた。しかし、1960年代の国境紛争後、インド政府や軍が主体となって進めたタウンの開発政策によって竜神が棲むといわれた山や川が道路や建物の建設のために破壊された。住処が穢れると竜神は怒って人々にルネーとよばれる病いや家の衰退をもたらすとされており、住処が穢れて竜神は遠くへ逃げてしまったと語られた事例もあり、近年竜神と人々の関係は開発という出来事によって変容しつつあることがうかがえた。(3) に関して、1980年代からモンパ社会では高僧たちを主体とした仏教復興運動が開始され、仏教を基盤としたモンパの文化を保護するという目的が掲げられ仏教教育の普及や仏教遺跡の修築・保全など様々な活動がおこなわれている。現地調査では、仏教復興運動の一翼を担う複数の団体の指導者ら4名にそれぞれ許可を得て活動内容や活動の目的・動機、現状についてインタビューを実施した。当初の運動では開発政策によって外部から労働者等が多く流入するようになり「モンパの文化が失われつつある」ということが強調されたため、モンパの暮らすアルナーチャル・プラデーシュ州西部（タウン県および西カメン県）の自治要求が運動の中心的な目的であった。しかし、運動の中心的指導者であった高僧が2012年に亡くなったことにより政治的主張は徐々になされなくなり、現在は一般庶民に対する仏教的知識の伝達や、失われていた儀礼の復興、仏教聖地に関する伝承の収集・整理、タウン県と西カメン県での動物の殺生や多量売買の禁止（一部地域を除く）などが実施されている。仏教復興運動による社会変革の展開は、モンパの歴史や文化の根幹に仏教にあるという考え方を背景とし仏教と関連した土地の記憶を公式の歴史・文化として創造し共有していく過程としてとらえることができる。そうした社会運動の流れのなかで、伝統医療、とくにチベット医学の治療者たちはモンパの仏教文化の担い手の一人として新たに位置づけられつつあり、社会変革へ向けた人々の活動の場に伝統医療従事者が招待されて伝統医療の概念や知識について講演をおこなったり、運動の指導者の社会貢献事業の一つとして伝統医療の診療所や無料のメディカルキャンプがしばしばおこなわたりするなど、社会運動の流れのなかに伝統医療が取り込まれる側面がみられた。以上の研究成果をもとに今後さらなる分析と考察を進め、伝統医療がヒマラヤ社会の文化復興をめぐる社会運動や人々の病いに関わる身体的感覚とどのように結びついているのかについて明らかにすることをめざす。

最後に、このような在外研究の機会を与えてくださった公益財団法人京都大学教育研究

振興財団に篤く感謝申し上げます。